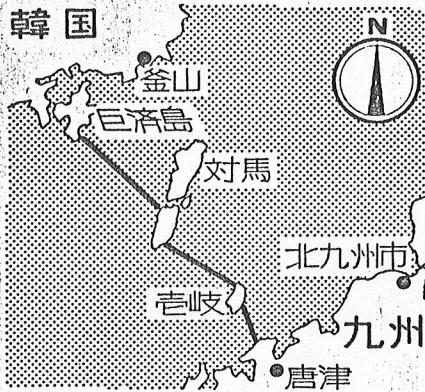


夢ふくらむ 日韓トンネル構想

世界平和の架け橋に

全長130キロ、工事20年

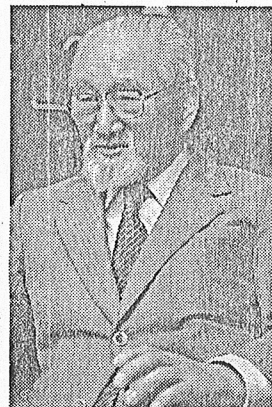
佐々木大名
教授ら研究 ゆくゆく欧州と直結



青函トンネルの技術生かす

この構想はもとも戦前から調査、建設費では地層が始め鉄技術によって作られた。昭和十七年には九州北端の加賀和十郎に對馬で陸上の地質調査で六百メートルの試掘(す)も行わ

日本と韓国の間約百三十キロ海底トンネルを結ぶ「日韓トンネル」構想が、佐々木大名教授(もん)を中心とした民間研究団体の手で練られている。来年早々に先進国が貫通する青函トンネルの調査、掘削技術を活用、ゆくゆくは韓国からソウルを結ぶロンドンに至るユーラシア・ハイウェイの現案を夢見た。佐々木教授は「国際間の現実を考えると、いまが夢のようなプランだが、実現すれば世界平和の架け橋になる。専門家で研究しなすで、国家プロジェクトに育てたい」と語り、このためのポリング調査が九州北端で続けられている。



日韓トンネルの構想を練る佐々木大名教授

れた。しかし、太平洋戦争で計画、米国フィラデルフィア市での国際中止され、戦後、朝鮮が独立して陸は立ち消えになった。戦中戦後の長い空白をへさんで、日韓トンネル構想は、五五年民間側から掘削され、大室建設の大株主(本店)大邸はそのPR誌「季刊大林」第七号で、東京・丸の内線、北京・天山南路、テヘラン・ローマ・ドーバー海峡・ロンドンを鉄道トンネルで結ぶ「ハイウェイ」構想を打ち出し、佐々木も青函間を結ぶ青函トンネルの技術を生かす。立派から、同五月、韓国ソウル大学に招かれた際、同大と延世大、韓国エネルギー資源研究所で「日韓トンネルについて調査を行なう」という調査が行なわれた。さらに今年一月二十七日、約二十年、工費は兆円以上とい

佐々木氏は、東大理学部地質学系、四十五年北米を退官して現在、青函トンネルの技術顧問として毎日、同トンネルに入るほか日本山岳会会長、日本写真測量学会、地理学会の重鎮として活躍している。「優秀な日本のトンネル技術を生かすには惜しい」とが口癖だ。